

2.21. 子どもと大人のともなる礼拝

(受難節第1主日)

「春を待ち望む」

みなさん、おはようございます。だんだんと春めいて来ましたが、みなさん、お元気でしょうか？大阪府を含む関西圏はいまだに緊急事態宣言中ではありますが、感染者の数が全国的に減少傾向にあることは大変ありがたいことだと思います。また、それ以上の朗報は、先週から国内における医師や看護師の方々へのワクチンの接種が始まったことであり、今後、高齢者の方々を優先的に、すみやかに国民全体に行き渡りますようにと心から願います。日本に生きる私たち一人一人が1年前の教訓を生かして、日常の感染予防対策を万全にして、さらに下降線へと向かい、終息に向かいますようにお祈りをしたいと思います。

さて、教会のカレンダーでは先週2月17日、灰の水曜日からレントに入っています。イエスさまの十字架の出来事と、そのみ苦しみを覚える時ではありますが、本日の聖書のみことばは、そのレントに関連した福音書の物語からとなります。「荒野での誘惑」として良く知られた場面ではありますが、神のみ子であるイエス様がひとつこ一人いない、もの寂しい石ころだらけの場所において、悪魔から誘惑される場面となります。「悪魔」という言葉を耳にしますと、私たちはアニメの世界で登場するような頭に2本の角が生えているような悪者をイメージするかも知れませんが、聖書の中で登場するサタンというのは、墮落した天使のことをさしています。はじめの人間であるアダムとエバをそそのかして、神様が食べてはならないと言われていた禁断の木の実を食べよう誘惑したヘビのように、大変ずる賢く、人の心を迷わし、悪の道へと誘いかけてくる存在、と言ってよいと思います。本日の場面では、その悪魔がイエス様に対して3度に渡り、惑わそうとしているというのがわかります。

サタンによる最初の誘惑は、「道ばたの石ころをパンになるように命じてみたらどうだ」(3節)との誘い文句でありました。なぜ悪魔はイエス様に対して、このような言葉を告げたのでありましょか？それはイエス様が1ヶ月以上何も食べていない、究極の腹ペコの状態であったからでありました。聖書にはその断食の期間は40日間と書かれています。ちなみに旧約の預言者モーセがシナイ山の山上において神様から十戒の言葉をいただく時、40日40夜、モーセは神さまと共にいてパンも食べず、水も飲みませんでした(出エジプト34:28)。一週間、飲み食いを全くしないというだけでも大変なことですが、それが約6週続くとなると、命の危険にさらされる状況ということが言えるかと思えます。普通の人であれば、精神的にも正常ではなくなり、もし目の前にごちそうが出されたのであれば、他人が見ているのもおかまいなしで、腹ペコのお腹を満たすために、むさぼり食べたくなるような心境であると思います。イエスさまは神のみ子であり、病人をいやされたり、湖の上を歩かれたり、5000人以上の人たちに給食を与えたりと、さまざまな奇跡をされましたので、道ばたに転がっている石ころをパンに変えることなど、十分に可能でありました。けれども、イエスさまはご自分の食欲を満たすために奇跡の力を用いることはなされず、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」と書いてある、とサタンに向かって言われました。確かに私たちはパン、つまり、食べ物や飲み物なしでは生きられませんが、それ以上に大切な私たちの心の糧、霊の食物である神の言葉の力とその重要性について、主イエスは語られたのでありました。

悪魔の主イエスに対する2度目の試みは、神様への信頼をしるしによって試みることでありました。サタンが主イエスを試すために連れて行った場所とは、エルサレムの神殿のてっぺんでありました。ちなみに現在のエルサレム神殿にある「嘆きの壁」の高さは37mとされています。4年ほど前の秋に、家族で秋の紅葉を楽しむべく大阪・交野市にある「星のブランコ」で知られる吊り橋を渡って山歩きをしたことがあります。星のブランコは標高180mということで、とても眺めがよいのですが、スリル満点でありました。

地上から一番高い場所が50mということで、人々が通る度に吊り橋に振動が伝わり、足がすくみ、まともに真下を見ることが出来ませんでした。おそらくこの神殿の頂というのは、神殿の城壁の南東の端っこであると思われ、そこからはキデロンの谷を見下ろすことができ、目がくらむほどの光景であったと思います。この場所で悪魔が主イエスに対して語った誘い文句というのは、この場所から「下に身を投げてみなさい」(6節)というものでありました。つまり、「おまえが本当に救い主であるならば、この場所からかりに飛び降りたとしても、神が必ずおまえを助けてくれるだろう。おまえは神のみ子なのであるのだから、神がおまえを見殺しにするはずはない」と語ったのでありました。さらにサタンは旧約の詩編の言葉まで悪用し、「神はみ使いたちに命じて、その手であなたを支えさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる。」(詩編91:11)と書いてあるから大丈夫と、用意周到に誘いかけたのでありました。しかしながらイエスさまは、悪魔の手のうちをすべて見破っておられ、すぐさま、「あなたの神である主を試みてはならない」(申命記6:16)とも書いてあると、こたえられました。つまり、主イエスは本物の信仰というものが、私たち人間の側で、勝手気ままな冒険をすること(危険を冒すこと)によって明らかにされるようなものとは違ふと、はっきり言われたのでありました。またしても、悪魔は神のみ言葉によって撃退されてしまうのであります。

そこで悪魔は最後の手段として、主イエスを非常に高い山へと連れてゆきます。そこでサタンは世界中の国々が栄えている様子を見せた上で、「ほら、ごらん。おまえがわたしにひれ伏して私を拝むならば、これらすべてをみな、おまえにあげよう」(9節)と言いました。悪魔のこの誘いかけは、とても巧みでありました。なぜならば、ただペコリと悪魔に向かって頭を下げさえすれば、世界の全てをあなたに与えようとの巧妙なわなでありました。かりに主イエスが軽い気持ちでサタンに頭を下げてしまうならば、一生その支配に服従しなければならず、禁断の木の実を口にしてしまったアダムとエバのように、後戻り出来なくなることを意味していました。けれども、主イエスは最後の誘惑に対しても断固とした態度をつらぬき、悪魔の甘いささやきを退けて、「引き下され、サタン!『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてあるではないか!」(10節)と言って、見事に突っぱねたのでありました。これには、悪魔もすごすごと引き下がることしか手立てがなく、主イエスは3度に渡る悪魔の巧みな誘いかけを全て退け、見事に勝利されたのでありました。

最初にふれましたように、現在、教会のカレンダーでは17日の灰の水曜日からレント(受難節)の時期を過ごしています。4月4日(日)のイースター(主イエスの復活日)の前日まで、6回の日曜日を除きますと、その期間はちょうど40日間となります。それはイエス様が荒野で40日40夜、断食をされた時期と同じであり、その事に由来しています。よってレントの期間中、イエス様を信じる私たち一人一人もイエス様が十字架に向かって歩まれた苦難の道を思い起こしながら、聖書のみ言葉に聴き、祈りの日々を過ごしたいと思えます。また、「レント」という言葉には本来、「春」という意味があり、日が長くなる季節であることを言い表しています。春はもうすぐそこまで来ていると、実感する今日このごろであります。私たちはこのレントの期間中、私たちの罪のために身代わりに十字架にかけられたイエス様のご受難の出来事に思いをはせながら一日一日を大切に過ごしてゆきたいと思えます。みんなが笑顔で、光輝くイースター(主の復活祭)を迎えることが出来るように、主の約束のみ言葉を信じて、この国難を乗り越えることが出来ますように、主に祈り続けてゆこうではありませんか。